第二次総合科学科改革における『卒業研究』の取り組み

１０期生３年次担任団
阪本　康之　　岡　　聖美　　深澤　孝之　　建元　喜寿
奥村　準子　　小松孝太郎　　渋木　陽介　　石田　光枝

【要旨】
総合学科発足以来、学習の集大成として、文部科学省の定める総合学科の原則履修科目『課題研究』を全員必修で行ってきた。３年前に系列改編を行い、これに伴う教育課程の改編やシステム変更によって『課題研究』にも変更を加えることになり、「必履修科目」としての『卒業研究』でのスタートとなった。『卒業研究』になって初めての取り組みの報告である。

【キーワード】卒業研究、探求心、問題解決能力、議論・討論する力、課題研究

１．必修科目化の経緯

本校では平成６年の総合学科発足以来、学習の集大成として、文部科学省の定める総合学科の原則履修科目『課題研究』を全員必修で行ってきた。

『課題研究』の目標は、「多様な教科・科目の選択履修によって深められた知的好奇心等に基づいて自ら課題を設定し、その解決を図る学習を通して、問題解決能力や自発的、創造的な学習態度を育てるとともに、自己の将来の進路選択を含め人間としての在り方生き方について考察させる」（平成５年２月「高等学校教育の改革の推進について（第四次報告）」より）となっている。本校において生徒は、自らの履修歴や進路希望、あるいは自己の興味・関心に基づいた課題を設定し、年間を通じて課題解決に向けて探究活動を行ってきた。

また、平成13年度入学生から『総合的な学習の時間』が導入され、その内容面から『課題研究』がそのまま活かせるということで、３年次に２単位設定した。

その後、平成１５年度入学生より系列改編が実施され、これに伴う教育課程の改編やシステム変更によって『課題研究』にも変更を加えることになり、その位置づけについて以下のような議論がなされた。

１）『総合的な学習の時間』として継続して位置づける。

指導要録や調査書上で、『総合的な学習の時間』と記載されている部分を『卒業研究』と記載し、数値評価ではなく記述評価を行う。

＜メリット＞
・記述評価により、研究内容をアピールしやすい。
・形態はどうであれ、生徒の主体性をアピールしやすい。
・『総合的な学習の時間』として、対外的なアピールができる。

＜デメリット＞
・他校の『総合的な学習の時間』と同一視される。
・数値評価がないことによって、生徒の学習意欲を喚起できない。

２）学校設定教科として位置づける。

①　教科『総合』として、位置づける。

＜メリット＞
・総合学科である学校としての取り組みや姿勢を表すことができる。

＜デメリット＞
・教科名として具体性に欠ける。

②　系列名を教科名として位置づける。

＜メリット＞
・系列の学習との一体化により、もっとも系列のまとめとしての『卒業研究』をアピールできる。

＜デメリット＞
・教科名が長くなる。
・下手な短縮形ではメリットが薄まる。

３）課題に応じて既存の教科の科目と位置づける。

＜メリット＞
・研究内容が表現しやすい。

＜デメリット＞
・総合学科や系列自体が既存の教科と必ずしも一体となっていないため、趣旨にそぐわない。
・課題に応じて教科を振り分けることになり、煩雑になる。
・総合的・横断的な課題の場合、特定教科と位置づけることが不可能となる。

これらのうち、もっとも強く意見が出されたのは1）『総合的な学習の時間』に位置づけるであった。しかし、これまでの『課題研究』の実績から専門教科の集大成としての科目の位置づけが良いこと、評定がつかない教科のレポートを強制することは困難であること、などの点から、『総合的な学習』としての『卒業研究』ではなく、「必修科目」としての『卒業研究』でのスタートとなった。

そこで、『課題研究』と同様、３年次担任と系列のメンバーから構成する「卒業研究部会」で授業を計画・実施する形をとった。一方、『課題研究』は３年次が始まってからのスタートであったのに対し、『卒業研究』では２年次の土曜日特別授業『アカデメイア』に始まり、３学期にはテーマ設定、構想発表までを行うことになった。さらに、系列の縛りを強くし、『課題研究』では認めていたＶ類（系列以外）の研究を認めず、系列の特徴に沿ったテーマだけを認めることとした。

総合学科改編以降『課題研究』の展開として、生徒の主体的な課題設定を前提としている。その実践をもとに、学習の深化・総合化を図る課題研究学習の展開として『卒業研究』を組み立てた。

＜基本方針＞

〇時間帯

・金曜日６・７時限目

〇指導者

・指導者は１６名

・系列の選択生徒数によって、系列内で指導者を決める。

・生徒約１０名に対して指導者は１名とする。

・指導者の選定については系列に一任する。

〇テーマ設定

・系列の特徴にそったテーマを基本とする。

・系列で取り組んでいるテーマや、継続研究のテーマなどを教員側が示す方法と生徒が独自でテーマを決める方法の両方を可とする。

〇３年次『総合的な学習の時間（１単位）』『進路研究』との関連

・卒業研究担当者と３年次担任団とで「卒業研究部会」を作る。

・３年次『総合的な学習の時間（金５）』は『卒業研究』指導者が担当する（持ち時間のカウントはなし）。担当者は適宜ミーティング等を行い、研究の進捗状況の確認、今後の方向性についてアドバイスする時間とした。

・３年次『進路研究（２単位）』は、年次会が担当（出欠の管理）することにし、内容は生徒の自発的な活動の時間とする。

２．２年次の活動（テーマ設定に至る経緯）

１）アカデメイアでの取り組み

土曜特別講座であるアカデメイアも２年次９月からは、系列ごとに系列運営委員に担当をお願いした。

①９月期（３回）

先輩に学ぶということで、先輩の研究論文を読み感想などを述べあい、課題研究発表会のビデオを視聴しディスカッションを行うなどして、これから行われる研究についての方向性・方法などを学習させた。

そして、もし自分が研究を行うとしたら・・・ということで、自分の興味・関心があることから、研究内容を考えさせ、お互いに研究したいことなどを出し合い、ディスカッションを行った。

それから、文献やインターネットでの調査を行い、どんな研究が行えるのか考えさせ、またその内容をプレゼンテーションさせることで、目的意識を持たせ、また他の人のアドバイスをもらうことで研究の発展に努めた。教員は参考になる話や、過去の研究例などを可能な範囲で紹介した。

②１１月期（３回）

自分のテーマをとりあえず決め、テーマについて「パワーポイント」を利用した３分程度のプレゼンテーションを行い、いま考えているテーマについて、質問や意見を出し合った。そして、卒業研究を進める道筋や計画を立て、担当の教員との個別相談を行いながら、具体的に研究を始めた。

③２月期（３回）

自分で決めたテーマについてこれまでの期間どんな活動をしてきて、どんな成果があったか発表を行った。発表の後、全体でディスカッションし研究のヒントや方法などについて考える。

２）総合的学習の時間（２年次３学期）での取り組み

この時間は、年次会が主体となって行った。各系列の専門的な指導はおこなわず、研究全般に関する指導を中心に行った。卒業研究の概略、テーマ設定の方法、進路との関係、研究計画の作成と実施などを概説した。また、生徒が研究に対して前向きにそして主体的に取り組んでいくには、教員がどのようなプログラムを提供すればよいか年次会で検討を行った。その結果、年次の構成員それぞれが、自己の研究歴や研究テーマ、あるいはなぜ今

の職業を選んだか、なぜその大学への進学を決めたのかといったことを、それぞれの表現方法で伝えようということになった。なぜ、数学のとりこになったのか、なぜ生物に興味を持ち始め高校で生物を教えるようになったのか、なぜスキー場での自然破壊に注目し研究するようになったのかなどをそれぞれの体験のなかでそれぞれの言葉で伝えた。

研究の細かい手法の説明なども重要ではあるが、日頃の学校生活の中では知ることのできない個々の教員の姿をこの時間で知るなかで、生徒それぞれが自己の進路と関係させながら総合学科での学びの集大成ともいえる『卒業研究』への気持ちを新たにしたようである。

3）進路研究での取り組み

この時間は各系列が主体となり専門的な研究指導を行った。以下、それぞれの取り組みについて記述する。

① 生物資源・環境科学系列

農業や環境に関するテーマは研究に時間を要したり、自然環境や季節に左右されるためできるだけ早くテーマ決めを行う必要がある。この点、新系列に改組されアカデメイアの導入や年次を横断した『総合的な学習の時間』が実現したため、これまで（「課題研究」）に比べ早い時期からの研究への取り組みが可能となった。しかしながら、次年度の校務分掌が未決定の中での指導者選定の難しさや、３年次になってからの２年次「進路研究」指導者とのバッティングが懸念された。そこで、系列の選択者が39名であったことから以下のような指導形態を取ることとした。

○ 指導者は４名で対応する。農業科から３名（嶋田・建元・渋木）、そして教科「生物」としての系列運営委員である岡が担当することにした。

・「進路研究」の指導を考え、嶋田班・渋木班をひとつの教室に、建元班・岡班をひとつの教室にまとめ、随時フォローできる体制にした。

○ これまで行ってきた『課題研究』の指導同様、上記指導者４名に加えて農業科の教員は実習助手も含めて『卒業研究』をバックアップすることとした。

② 生活・人間科学系列

２年次１月以降の学習活動では、文献を読むことをテーマにした。研究のための情報収集について、手軽なインターネットに頼りがちな生徒が多く、文献を読む姿勢がなかなかみられない。しかし、文献を読むことは、ただ知識を得るだけでなく、研究の進め方を学ぶなど、生徒の学習活動の幅を広げるものであると考える。そこで、文献を読む活動を中心に、卒業研究構想発表会までの全５回の学習活動を以下のように進めた。

○第１回　オリエンテーション

系列の生徒全員に対して、研究の進め方や、情報収集シートの作成について説明を行った。文献は、次回からの学習活動時間に１冊ずつ、春休みは２冊とし、３年次４月までに計５冊を読むことを課題として課した。

○第２～４回　文献調査と情報収集シートの作成

文献を読んで、情報を収集し、まとめ、整理する活動を行った。当初、雑誌の類を準備していた生徒もいたが、シートに内容をまとめる作業を通して、徐々に研究で用いる文献を選択できるようになっていた。

○第５回　卒業研究構想発表会

第２回～第４回の学習成果をふまえて、卒業研究の構想を考えられるように、発表会で用いるパワーポイントのスライド割を、(1)研究目的、(2)研究方法、(3)文献研究の結果①②③、(4)今後の予定とした。構想発表会は、これまでの課題研究に比べると、文献調査を行った成果が反映され、研究に深まりがみられた。またそれぞれが文献を読んで知識を得ていたことから、活発に質疑に参加する姿も見られた。教員にとっても、生徒が文献をどんなふうに読み取ったのか、何に関心をもっているのかなどを把握でき、指導に生かすことができた。また、その後の研究活動で、文献調査を行った著者に対してアプローチを試みた生徒もおり、この時期の学習活動が生かされていたといえる。

３．３年次の活動の流れ

３年次では、金曜日５限に『総合的な学習の時間』、６・７限に『卒業研究』を設定し、この３時間は、『卒業研究』担当者がミーティングを行うなど指導を行った。また、調査等で学校外に出かけられるようにもした。希望する生徒は事前に外出願いを、事後に報告書を提出させた。この時間以外に月曜日７限・火曜日７限に「進路研究」を設定し、この時間は担任が始業終業の出席を確認し、生徒が自主的に作業に取り組む時間とした。こうすることで、１学期は週５時間の『卒業研究』の時間を確保し、生徒の取り組みの充実を図った。６月２７日に第１稿として論文５枚、９月２日に第２稿として論文10枚の提出をしているため、２学期は月曜日７限・火曜日７限の「進路研究」はなくし、３年次生は放課にし『卒業研究』をやりたい生徒は１学期同様に取り組むなど、自分の進路に合わせた取り組みの時間とした。

１１月４日に２０枚以上の論文完成、９日に学年発表会として終わらせたので、３学期は金曜日５限の『総合的な学習の時間』のみとし、６・７限の『卒業研究』もなくした。『総合的な学習の時間』は２月の研究大会での『卒業研究』発表会のために学年で取り組む時間とし、１１月９日の学年発表会時のPowerPoint等資料を整備し、ブースで全員発表するための時間とした。これは、研究大会での『卒業研究』発表会のときに、多くの学校の先生から、発表者が優秀なのはわかったが、他の生徒はどの程度のレベルなのかを知りたいという要望に応えたものである。

４．発表会について

１）中間発表会

中間発表会は５月２０日（金）の５～７限に行われた。中間発表会の目的として、次の３つを設定した。

① これまでに自分が取り組んできた卒業研究をふりかえり、その成果をまとめる。
② 今後の課題を明らかにし、今後の研究の方向を探る。
③ 他者の発表を聞き、必要であれば、研究の方法、態度、内容を自分の研究に取り入れる。

発表は、２０～３０人を１グループ（グループ内の生徒は同じ系列）とし、そのグループに教員２、３人がつく形で行われた。１人あたりの発表時間は、発表４分、質疑１分の計５分間とした。発表に際して、生徒にはＡ４サイズで１枚のレジュメを用意させた（巻末資料１参照）。また、他者の研究発表に対するコメントを記入する用紙を配り、それぞれの研究について、コメントと５段階での評価を書かせた。

以下では、発表の様子を、前述した中間発表会の目的に照らして書いていく。

①について：自分の研究を他者に理解してもらうには、研究の内容を具体化しなければならない。それに対し、多くの生徒は、これまで漠然と研究を進めていたため、それを形として具体化するために試行錯誤していた。このように、研究を具体化するためのきっかけという意味で、中間発表会を設定したことは有意義であった。

②について：発表会の準備を通して、自分の課題を見つけることができた生徒が多かった。加えて、他者の発表を聞いて自分の研究と比較し、「自分の研究の仮説はまだまだ明確でない」などと課題をつかむ生徒もいた。

③について：他者の発表に何となく同調してしまうという生徒が多かった中、批判的な態度で他者の発表を聞くことができた生徒もいた。例えば、文字のない絵本が幼児にもたらす影響を研究している生徒の発表に対して、「それでは紙芝居と変わらないのでは？文字のない絵本をどのように特徴づけるのか？」と批判する生徒もいた。このような批判的態度は、自分の研究を客観的に進めることにもつながり、重要なものといえる。

２）系列内発表会

系列内発表会は１０月２８日（金）の５～７限に行われた。系列内発表会は、中間発表会と違い、完成された研究を発表する場として位置づけられた。そのため、発表会の目的に関しては、前述の②よりも①を主とした。発表形式は、発表時間を発表５分、質疑２分の計７分間としたことと、レジュメのひな形を若干変えたことの２つ以外は、中間発表会と同様であった。

系列内発表会では、１、２年次生も研究発表を見学した。１年次生は１２月に２年次生以降の学習を形作る系列を選択し、２年次生は１２月から卒業研究をはじめるため、それらの参考になるように、見学の場を設定した。

１、２年次生からは、先輩の発表に対して質問するなど、積極的な姿勢もうかがえた。また、後輩の前では恥をかけないと、発表準備を懸命に行う３年次生が多かった。さらに、３年次生の中には、発表会や発表が終わった後に、後輩に向けて卒業研究に関するアドバイスをするものもいた。このように、１、２年次生が発表会を見学したことは、お互いによい刺激になったようであった。

なお、系列内発表会での教員評価、生徒（３年次生のみ）評価を総合的に判断して、次に述べる学年発表会の発表者１８人を選出した。

３）学年発表会

学年発表会は、１１月９日（水）５～７限に、生徒１６０人と教員１６人が多目的教室に集まって行われた。発表時間は発表６分、質疑なしとし、レジュメは系列内発表会と同じものを使用した。

以下では、発表する側の生徒と聞く側の生徒に分けて、学年発表会の様子を記述する。

発表する側の生徒：研究の意図、目的、方法が明確であり、積極的に活動していたため、研究から得られた結

果も明確であった。１つの仮説検証が終わったら、それを基に新たな課題・仮説を発見して、探究心をもって研究を発展させる生徒も多かった。さらに、発表者全員がプレゼンテーションを上手に行っていた。単にパワーポイントを使うというのではなく、自分の研究を他者に伝えるためには、パワーポイントの何をどのように使ったら有効かを考えて発表していた。

聞く生徒：前述した２つの発表会と同様に、発表者の研究を５段階で評価させた。その評価を見ると、研究の内容で評価するのではなく、プレゼンテーションの様子に気をとられる生徒が多かったように思えた。また、彼らにとって、文系の生徒が取り組んだ文献研究などを評価することは難しく、工学系で何らかの作品を作った研究の方がわかりやすかったようで、全体的には後者の研究の評価が高かった。

最後に、系列内発表会と同様に、教員評価と生徒評価を総合的に判断して、２月１６日の卒業研究発表会での発表者６人を選出した。

５．『総合的な学習の時間』の活動（ポスターセッションの取り組み）

１）本校の総合的学習の時間

本校では、教育課程に各年次に１時間ずつ『総合的な学習の時間』が配当されている。１年次では「研究基礎」というテーマで、主に自分の興味ある分野について読書活動を行っている。また、２年次では「研究実践」というテーマで、１～２学期は校外学習を題材とした国際理解学習、３学期は３年次に行う卒業研究の課題設定や研究計画の検討などを行っている。３年次では卒業研究の時間と連動して、「研究表現」という時間として取り扱っている。金曜日の５時限目を『総合的な学習の時間』、６・７時限目を卒業研究の時間としているが、実際にはしっかりと区別された時間としているのではなく、総合的学習の時間も卒業研究の時間として弾力的に運用している。卒業研究の活動の中で、担当者ごとのグループ内での発表や系列発表、学年発表といったプレゼンテーションの時間、及びその準備に当たる時間を１単位相当分と考え、総合的学習の時間としている。

卒業研究は１学期に４時間、２学期に２時間で２単位の取り扱いとしているため、２学期で授業終了となる。ただし、総合的学習の時間は通年（各学期１時間）で行われるため、３学期も授業が継続する。その３学期の総合的学習の時間は、１年間の研究を１枚のポスターにまとめ発表する時間とした。

２）学習の目標

卒業研究で取り組んできた成果は系列発表会や学年発表会で人に伝える機会がある。発表会では一人５分程度の時間が与えられ、その中で自分なりに工夫し人に説明する。そのような一般的なプレゼンテーションに加えて、自分の考えやアイデアを単純化し、明確に相手に伝えることのできる表現能力も、生徒に身につけてほしい力の１つである。ポスターの製作を通して、少しでもそのような力を育成したい。

３）学習活動の内容

Ａ１サイズの用紙に、卒業研究の「目的」、「研究方法」、「結果」、「考察」について単純・明解にまとめたポスターを作成させる。３年次の３学期は既に進路も決定し、比較的気持ちに余裕のある者と、一般入試等を控え、入試の準備に忙しい者がいる。後者の生徒たちに加重な負担とならないように配慮する必要があった。そこで、ポスターを製作するにあたっては、ポスターに使用する図や表などについては、これまでの発表会等のプレゼンテーションで使用した発表原稿やパワーポイントなどの印刷物も使用してよいこととした。

製作時の注意点として、「よいアイデア・考えも人に伝わらないと意味がない」こと、「プレゼンテーションの基本は、簡単・明解である」ことを強調して伝えた。

４）活動の予定

具体的な活動の活動予定を表１に示す。

表－１　３学期の活動予定

月日（曜日）	活　動　内　容
12/ 2 （金）	３学期の学習内容について説明
12/ 9 （金）	ポスター製作活動　（構成）
12/16（金）	ポスター製作活動　（製作）
1/13（金）	ポスター製作活動　（製作）
1/20（金）	ポスター製作活動　（製作）完成予定
2/15（金）	ポスター展示・発表会

３年次３学期は１月末で授業が終了するため、実質ポスターの製作ができるのは４回程度である。入試準備のある生徒もいるため、授業時間内だけで終わらせるよう指導した。

ポスター展示・発表会の日は、全員がセッション形式でポスターを展示し、随時説明を行うことも伝え、ポス

ターとあわせて、自分の研究を簡単（１分程度で）に説明できるようにしておくことも指導した。

5）活動の様子

現在（12月末）まで３回の授業を行った。趣旨を理解し、構成の段階からどうすればうまく伝えられるか真剣に考える生徒がいる一方で、全く活動しようとしない生徒も少なくない。活動に積極的でない生徒からは「卒業研究は終わったのに、何でこんなことしなければならないのか」というような意見も聞かれた。卒業研究を始めるまえに、卒業研究および卒業研究と関連している総合的学習の時間を含めた目標および学習計画を提示していなかったことなど、生徒に対して説明が十分でなかったことが原因の１つとして考えられる。

これから１月、２月と活動は継続するが、これまで取り組みが十分でない生徒には声をかけながら、少しでも学習の目標が達成できるように、工夫して進めたい。
今後の活動、および最終的な活動のまとめは、次の機会に報告する。

6．卒業研究における「評価」を考える

－自己評価（ポートフォリオ評価）の重要性－

1）「課題研究」から『卒業研究』へ

平成１５年度からの本校の第二次総合学科改革において、総合学科改編以来取り組んできた「課題研究」についても『卒業研究』に名称を変え、さまざまな改革がおこなわれた。２年次３学期から「進路研究」の時間を利用した準備期間の本格的導入、アカデメイア受講者に対するテーマ設定の先取り学習、３年次１学期の集中５時限授業などがそれである。これら改革の中心には、『卒業研究』の位置づけを、『総合的な学習の時間』から「学校設定科目（必修科目化）」へもどす動きがあった。

2）『総合的な学習の時間』から再び必修科目へ

このような動きの背景には、『総合的な学習の時間』に位置づけられた平成１５・１６年度の「課題研究」を実施したなかで、「単位修得の負荷がない科目に課されたレポートを生徒全員が提出を指導するのは難しい」という実感を教員が持つにいたった点がある。また、『総合的な学習の時間』に対する社会的な評価が定まらない状況のなかで、総合学科改編以降積み上げてきた「課題研究」の成果が、上級学校に対する調査書のなかで中途半端に評価されることもマイナスに働く、という考えもあったように思われる。その一方で、総合学科のパイオニアとして評価されるべき本校が、『総合的な学習の時間』に力を注がず別の科目として『卒業研究』を設置することに違和感を覚える教員もあった。

3）必修科目としての評価

このような紆余曲折を経て、初年度『卒業研究』はスタートした。改革一年目の今年は様々な工夫をおこなってきたが、特に筆者が課題に考えたのは、「評価」の問題である。総合学科の高校生活を総括する位置づけにある『卒業研究』の評価をいかにおこなうべきか。必修科目としての５段階評価（相対評価）をおこないつつ、『総合的な学習の時間』のもとめる「ねらい」に耐えうる評価システムの構築が課題であると考えたからだ。

相対評価については、従来どおり、中間発表会・系列別発表会に提出されるレジュメと生徒の発表を材料に、生徒による相互評価や複数の教員による評価をおこなってきたことに加え、今年度は提出されたレポートのうち優秀な作品を卒業研究部会スタッフ全員で回覧して、評価「５」の基準についてめやすを話し合うなどの工夫をおこなってきた。

4）総合学習の評価のあり方

一方で、こうした卒業研究のように生徒が自ら研究テーマを設定しておこなう総合学習は、生徒個々の主体的な追求活動が評価の対象となり、そのどの部分に焦点を当てて評価すべきか意見の分かれるところである。学習指導要領に挙げられた『総合的な学習の時間』のねらいには、

① 自らの課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。
② 学び方や物の考え方を身につけ、問題の解決や探究活動に、主体的に、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること。

とある。つまり、生徒が自ら学ぶプロセス、あるいは問題を解決するプロセスそのものが、生徒個々の主体的活動であり、評価されるべき対象となるのではないだろうか。従来我々教員は、生徒の「成果（結果）」にとらわれた評価に偏りがちであり、生徒が問題を解決していく「プロセス」を軽視しがちであった。研究成果としてできあがったレポートに、科学的視点や独自性などを求めそれを評価してきたが、卒業研究のような総合学習にお

いては、自ら課題を見つけ、自ら考え、自ら学び、問題を解決していく自己学習力がより重視すべき力なのではないだろうか。加藤幸次（参考文献参照）によれば、このような「問題解決のプロセスの全体を見通す認識力」を「メタ認知」と呼んでおり、子どもが自己成長するために必要な力であると述べている。教師の立場は「指導者」ではなく「支援者（よき相談役）」の位置にとどまり、「子どもの自己成長（問題解決力高める）」を促す自己評価を仕立てることが重要である、と指摘する。

5）プロセス評価の重要性

したがって、このような自己評価には、従来の「プロダクト評価(学習成果の評価)」よりもむしろ、生徒の問題追及の「プロセス評価」をおこなうことが重要となる。その評価材料として学習活動のプロセスをデータとして収集したものが「ポートフォリオ」であるが、ポートフォリオを構成する重要な要素として、生徒が毎週記録・提出している「卒業研究の記録（巻末資料２参照）」が挙げられる。この用紙は、もともと生徒の活動状況を担当教官が把握する目的と、生徒自身が研究の進捗状況を自ら把握する目的につくられたものだが、自己の学習活動を常に「反省し、ふり返る」という自己評価としての役割も果たしうると考えた。そこで、今年度筆者が担当した生徒９名のなかから、特に研究活動が充実していた生徒の記録を以下に分析し、評価のありかたについて検討してみたい。該当生徒は、生活・人間科学系列に属する３年女子で、近年ブームとなった「昭和文化」に強い憧れをもっていたことから、研究テーマの設定を考え始めた。１学期の記録をまとめたものを表－２（表内傍線は筆者による）に示す。詳細に読むと、生徒の「自己成長」の軌跡がはっきりと読み取れた。

この生徒は、卒業研究のテーマ設定に際して、自分が漠然と魅力を感じていた「昭和」という時代を代表する様々な象徴的事物を研究対象にしたいと感じていた。しかし雑多な対象から自分の興味関心のあるものを絞り込み、研究テーマを焦点化することの難しさにぶつかった。いろいろな教員からアドバイスをもらいながら、結局この生徒は自分で「ポーズ人形」という研究対象を選択するに至った。また、テーマ設定と同時に高校卒業後の進路についても悩みながら明確化していき、最終的には、自分が興味のある「昭和の文化」について学問として学べる場を、４年制大学の人文学部日本文化学科にもとめることとなった。大学卒業後の進路まで決めることはできていない（学部の特徴として、研究分野を活かして就職することが難しい）が、「自分の好きなことを研究し、それを活かして大学へ進学する」という結びつきが、生徒の研究に対するモチベーションを引き上げたと思われる。

また、研究活動をとおして、さまざまなスキルの獲得（レジュメの書き方、データの管理方法、デジタルカメラの使用方法、文献の引用方法、研究レポートの文体等）と、意識の変化（「やってみないと身につかない」ということを、失敗をくり返してわかった、）や、研究の深化（新たな研究対象の発見）が見られた。こうした「学び」のプロセスそのものが加藤の指摘する「メタ認知力」と換言することができるだろう。また、生徒自身がこのような自己成長を意識できたということも、毎週の記録を丁寧におこなってきた自己評価活動の成果ではないだろうか。

6）評価に関する今後の課題

『卒業研究』という総合学習を必修科目として位置づけていくうえで、相対評価と自己評価を共存させていく評価システムの構築が今後の課題となるだろう。また、生徒個々の学びのプロセスのどの点に重きをおくべきかについても、専門分野による評価観のちがいや個々の教員の価値観も反映されてくる。（たとえばものづくりと哲学的思考、活動重視か知識理解重視か、など）

筆者は３年間この科目に関わってきたなかで、「行動をおこす」ことが課題探求活動におけるもっとも根源的なの規準となるのではないかと考え、評価規準（巻末資料３参照）を作成し、これにもとづいて次章の自己評価アンケートも作成・調査をおこなったが、まだまだ課題は多いと実感している。今後さらに卒業研究に対する評価の分析が進められ、細分化・具体化された項目による筑坂独自の「卒業研究評価規準」が作成されることが目標となるだろう。なにより、生徒自身が卒業研究の成果を語れるようになることが、もっとも端的な評価となるかもしれない。

【参考文献】

加藤幸次・安藤輝次『総合学習のためのポートフォリオ評価』黎明書房　1999年

７．２学期自己評価アンケートの集計結果

前章において、ひとりの生徒の個人記録を詳細に分析した結果、自己評価の重要性が明らかとなった。そこで、今年度の卒業研究部会において２学期の評価のなかに「自己評価アンケート」（巻末資料４参照）を加えること

表－2　生活・人間科学系列に属する３年女子の１学期の記録（表内傍線は筆者による）

月・週	生徒が記述したコメント	生徒の意識分析（筆者）
４月 ３週	テーマ：「昭和時代の紹介本（？）をつくる」 自己評価：「なかなか自分では決められないので、色々言っていただいてよかったです。でもやっぱり難しい‥‥。決めがたいです。」	・研究の目的が漠然としている。「昭和」という大テーマから焦点を絞ることに難航していることがテーマ名からもうかがえる。
４月 ４週	テーマ：「ポーズ人形から昭和三〇～五〇年時代をふり返る～ノスタルジアの正しい在り方～」 活動内容：「研究テーマのスポットの決定・大学調べ」「進路相談室にて卒業研究を読み、書き方を学ぶ。自分の考えていることを、とりあえずひたすら書いてみる。」「昭和ブームについての考え方をネットで発見。テーマから導き出す、自分の言いたいことを明確に。テーマ名の仮定」 自己評価：「テーマが決まったが、目次は、はっきり決まらなかった。でも、前回にくらべたら、先が見えてきたし、楽しくなってきている。アンケートや調査をするのが、ゆううつです。」	・テーマ設定のために、自分の希望進路を考える。先輩たちのレポートを読んで参考にする。 ・上級生の研究方法に「アンケート調査」が多用されていることに気づく。たくさんの生徒に依頼することをおっくうに感じている。
５月 １週	活動内容：「本をノートにうつす。（大事なとこ）」「レジュメを考える」 自己評価：「新しい本を買った。それに、私にとって必要なことがほとんど書かれていたので、ほぼ、それを中心にやりたい」	・教師のアドバイスで「研究のコア（核）となる一冊は図書館で借りずに自分で買うべし」を実行。コアの一冊が見つかり、研究の方向性が見えてきた。
５月 ２週	活動内容：「研究動機・目的の見直し、確認、変更、まとめ」「レジュメづくり」 自己評価：「一度、レジュメをつくっていたので、もうできていると思っていたが、直しをくらったので、やばい状態になった。レジュメの書き方が、本当わかりづらい‥‥。」	・中間発表会に向けた準備。「レジュメの書き方が分からない」としきりに尋ねてきた。人前で話すことが苦手な性格のため、中間発表会が相当のプレッシャーに感じているようだ。
５月 ３週	テーマ：現行のものに確定 活動内容：「レジュメリハーサル」「レジュメ発表」 自己評価：「体育祭でつぶれてリハーサルができなかったのが残念だった。」「私だけ、奥村班から（中間発表会の名簿が）ハズされていた（エクセルのソートミス）ことに、大変ショックをうけた。」	・中間発表会前にリハーサルをおこなったが、行事の都合で全員ができなかった。発表会は系列別に実施。（レジュメは全員に印刷）
５月 ４週	自己評価：「日々日々、いろいろ変更が増えて、定まっていないんだなと思う。少し原稿を書き始めて、じょそう（序章？助走？）ができてきたかなと思っている」 次週の準備：たくさん入るフロッピー	・発表会後、レポート執筆を促し、ファイル（データ）の保存上の注意（バックアップ）やメディアを指示。
６月 １週	活動内容：「早退」「進路に向けての作業（志望理由書作成？）」 「昭和史についての本を読んだ」 自己評価：「現在原稿は６ページほどできている。だが、思いつきと勢いでとりあえず打ち込んでみたものといったかんじである。本文をもちいたいことが多いので、結果に自分の意見が書けそうだが、今は資料を打ち込むことで手いっぱいな状態だ。 次週予定：「昭和史をいろいろと読んで、全体の大きな流れや出来事などが少し分かってきたので、ポーズ人形に戻って、また、いや、これからポーズ人形を通して昭和えお見ていこうと思う。原稿をとりあえず作ってみる。」	・中間考査前の停滞期（レポート執筆が進まず、進路準備を優先したり早退してしまったり）。 ・「思いつきと勢いでとりあえず打ち込んだもの」を見て、昭和の歴史を概略するよう指示。研究全体の流れを意識し始める。
６月 ２週	使用資料：「使用文献は増えていません（３冊）。（目を通したものは）現在全部で‥‥１１冊くらい‥‥あります。」 自己評価：「原稿を書き出す作業は進んでいった。先生に提出したものをたくさん直していかなくてはならない。色々アドバイスをもらい、少しずつだけど研究らしくなっていくと思う。昭和の歴史を調べるのは大変だ。だが、なるべく調べる。ポーズ人形の研究にも取り組みに入った。」 次週予定：「とりあえず昭和歴史の前ふりはおいておいて、ポーズ人形の方へ進んでいこうと思っている。具体例として挙げるポーズ人形を見つけ、それに合ったファッションの例も見つける。引用が多かったので、自分の言葉に直して文を作るよう心がける。写真の有効的な使い方を目指す」	・自分の研究に必要だと思われる資料（書籍）の冊数が充実。「使用文献」は本文中に引用した資料。「目を通したもの」は、「昭和の歴史」や写真集など、自分の研究のイメージをふくらませたもののようだ。 ・レポートの書き方をアドバイス（引用のしかた・写真のリード文など。）
６月 ３週	自己評価：「写真に１つずつコメント（リード）をくわえた。それだけ、ページに写真のある意味を見いだせた気がした。写真をただはるだけではダメなのだと実感した。」	・アドバイスを実行し、レポート中の写真資料の価値を再確認。
６月 ４週	活動内容：「第一稿の提出」「進路を考える」「ファイルの整理（人形関係について）。中原淳一さん（昭和のイラスト画家）について興味がわいた。ほかにも夢二さんとか、女性のイラストを描く人が男性なので、おもしろいと思った。」 自己評価：昔に使ったレジュメやら研究開始当時のものを見てみると、今の自分はがんばったなと思った。デジカメが少し使えるようになった！！研究の書き方など、やってみたら、けっこうなんとなくわかってくることがわかった。やってみないと身に付かないのだと言われた通り、やってみて失敗をくり返してわかった。もっと人形の例を出して、現代とも比較して、考察までたどり着きたい。	・研究の発展（新しい研究対象「中原淳一」の登場。）研究が深化していることが示される。 ・研究のためのスキルの獲得（デジカメのデータをレポート上に貼り付け） ・試行錯誤と失敗による経験の蓄積を意識。
６月 ５週	活動内容：「今までの研究関係ものの整理」「卒業生の研究読み→最初から最後まで、研究者がしゃべっているような感じで。だから、引用が有効に使われるのだ、ということが分かった。」 自己評価：「昭和についてのページも人形についてのページも付け加えと直しが終わった。書き方がわかったような気がする。流れにのってきた‥‥。」	・学期末に一学期の研究をふりかえる。 ・卒業生のレポートから、レポートの「文体」を意識。（レポートは誰に向けて書くものか）

を提案した。目的のひとつには、２学期末にレポート提出が終わり、卒業研究がひと段落した時点での生徒の率直な意見を聞き、来年度に活かしたい、という意図もあったが、生徒自身にも自らの研究活動をふりかえり、「メタ認知」の発達を促したかったのがもう一つのねらいである。

表－３　２学期自己評価アンケート　集計結果

2005年11月実施　回収率：95.6％（152/159名）

※数値上段は人数、下段は％を示す

		できた	まあまあできた	あまりできなかった	できなかった
活動の記録	①記録用紙の提出･自己評価	22 14.5	55 36.2	62 40.8	13 8.6
	②資料整理	44 28.9	49 32.,2	36 23.7	24 15.8
系列内発表会	③レジュメ作成・プレゼン準備	34 22.4	78 49.3	39 25.7	4 2.6
	④他者への説明(レジュメ)	24 15.8	79 52.0	43 28.3	6 3.9
	⑤他者への説明（発表）	27 17.8	41 27.0	66 43.4	17 11.2
	⑥他者の発表を聞く	84 55.3	52 34.2	6 3.9	6 3.9

		はい	いいえ
研究活動	⑦レポート以外の作品制作	76 50.0	74 48.7
	⑧参考図書数	平　均　4.4冊	
	⑨具体的な書籍名	集 計 省 略	
	⑩課外活動への自主的参加（ボランティア活動など）	34 22.4	113 74.3
	⑪インタビュー・訪問等校外での活動	61 40.1	88 57.9

〈自由回答からの抜粋〉

①記録用紙の提出・自己評価

「できた」「まあまあできた」と答えた理由

・その日、活動したことをちゃんと書いていたから

・進行状況を理解できた

・毎週書いて整理することで来週やることを確認できた

「あまりできなかった」「できなかった」と答えた理由

・毎回急いで書いたのであまり細かく書けなかった

・１学期は提出したが、２学期は出し忘れが多かった

・書き忘れることが多かった

②資料整理

「できた」「まあまあできた」と答えた理由

・そうしないと研究がよく進まなかったから

・全部（生徒用PCからｻｰﾊﾞの）作業ﾌｫﾙﾀﾞに保存した

・もらった資料はきちんととじた

「あまりできなかった」「できなかった」と答えた理由

・資料をあまり使わなかった

・すべてＵＳＢ（ﾌﾗｯｼｭﾒﾓﾘ）に入れていた

・青いファイル（６期生から引き継がれたバインダー）は使用せず、自分のを使用していたから

③レジュメ作成・プレゼン準備

「できた」「まあまあできた」と答えた理由

・自分の中でもまとまっていたから、書くことは決まっていた

・レジュメやプレゼンはけっこう好きな方なので、力を入れて出来たと思います

「あまりできなかった」「できなかった」と答えた理由

・ほぼ、アドリブ（原稿を作っておくべきだった）

・入試が近かったので準備にあまり時間をかけることができなかった

④他者への説明（プレゼン）

「できた」「まあまあできた」と答えた理由

・図をつかうなどしてより分かりやすくした

・何回か先生に見てもらって手直しした

・あの小さな行に何をのせればよいのか迷いました。でもできるだけ詳しくまとめられるように頑張りました。

「あまりできなかった」「できなかった」と答えた理由

・うまくあのスペースにまとめることができなかった

・まとめるのが難しかったので他者にはうまく伝わらなかったかもしれない

・伝えたい内容全部は伝えられなかった

⑤他者への説明（発表）

「できた」「まあまあできた」と答えた理由

・見た友達にわかりやすかったと言われた

・読む紙を用意せず、客？の顔を見て話せたから

・パワーポイントが見やすかったし、模造紙も使った

・中間発表の時よりできたから

「あまりできなかった」「できなかった」と答えた理由

・声が小さくて聞き取りづらいと言われた
・緊張してうまくできなかった。卒研をちゃんとおわらせることができなかった
・発表練習をやらなかったから

⑥他者の発表を聞く
参考になった点
・パワーポイントの使い方や発表のしかた、研究方法
・原稿を読んで発表している人と、自分の言葉で発表している人で伝わり方、わかりやすさが随分違う
・話し方やスピードなどどうすれば聞き取りやすいのか
・自分とは異なった視点から問題を見つけて取り組んでいた。様々な視点に立つことができた。
・みんなとても行動的であちこち出むいているところ

⑪ボランティアなど研究テーマに関わる自主的活動
・ボランティア活動に参加　　１７名
・訪問や見学、ﾌｫｰﾗﾑ・ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ参加　１１名
・就業体験や研修（ｱﾙﾊﾞｲﾄ含む）５名

⑭研究によって自分がどのように成長したか。どんなメリットデメリットがあったか。
メリット・プラスの回答（抜粋）
a．理解の深化、知識の再構築
・育児休業法についてくわしくなった。研究をはじめたころは、育休を取ることが育児に参加することだと思ったけど、色々な話を聞いたことで、育休をとるだけが育児参加ではないことに気づき、どうかかわっていくかが重要なんだと感じた。
・自分の中にあった障がいの人にたいする心のバリアーの存在もつかめた。その存在をなくすわけではなく、受け入れることが出来たのではないかと思う。
・この研究を通して、問題に対する解決意識が高まったのではないかと思う。
・２年間工学情報で学んだことを使うことができ、また新しい知識を取り入れることができた。
・自分の家族もコミュニケーション不全の部分があったので、この研究を通しその改善につなげることができた。
・校庭にある一通りの雑草の名前が分かるようになり、我ながら成長したと思う。
・物は想像だけでなく作りあげられる物だと考えらえるようになった。そして今の物に満足するのではなく、発展へのことを考える意味を見い出せたと思う。

b．研究活動に関するスキルの獲得、技術の向上
・wordを使い慣れることができた。何か出来事をまとめるという作業の効率がとてもあがったと思う。
・レポートの書き方やパワーポイントのことが分かった。文章を書くことへの自信が少しついた。
・ＣＡＤでの設計が出来るようになった。新しい物を開発することが出来た。
・Vasicの技術が上がった。
・短期間で服をいっぱい作れるようになったこと。
・理論的に考えること、データを読み取る力、などさまざまなことが身についた。
・せんさいな作業ができるようになった。
・デッサンが上達したこと。「必ず上達する」ということを身をもって証明できたこと。
・手話ができるようになった。障害について深く考えるようになった。

c．主体的活動にともなう人間的成長
・色々なことを知ったし、自分はどう生きていきたいか、についても考えたことがあるし、レポートを書く勉強になったと思う。
・人と関わることができて行動力を発揮出来たと思う。
・知らない場所でも積極的に出かけていけるようになった。
・自ら足をはこべばはこぶほどたくさんのものを得られた。将来なりたいものがみえてきた。
・自分で考えて、自分でやりとげる力が少しは身についたはず。
・自分で調べることの大切さと難しさを知った。
・常に問題意識を持てるようになった。
・一つのことに一定期間うち込むことを覚えた。
・すごい積極的になったと思う。インタビューや協力の依頼などから責任感や積極性を得ました。また読書が好きになったこともプラスになりました。
・自分で決め、自分で行動するため、自己責任が必要であったことから、その面で成長した。
d．メタ認知力の向上
・調査結果から色々な仮説をたてられるようになった。
・失敗に慣れた。もっと考え、確かな物にしてから物事を行うべきだと思った。
・研究した学問分野の奥深さを知った。考えを言葉にすること、一つの目標に向けて長い時間取り組むことの大変さを知った。
・自分で問題を提示して考えるということが学べた。

・色々な事を考えて、イメージしたりする事も必要だと思った。
・「100桁以上のプログラムを書いてみた」という事自体に意味があったと思う。
・実験が上手くいかないとすぐにあきらめるという事を自分は考えているということがわかった。
・あまり意味のない研究だったので、今までの自分をふり返り、深く反省した。
・目的をはっきりと持ち、それについてどのようにしたらよいか、という事を考えられるようになった。
・研究の大切さ、文章を読む人へ分かりやすく書く苦労、何かを犠牲にしてまで研究をする苦労。
・試行さくごができるようになった。

e．達成感・充実感、将来への展望・再確認
・自分が、好きなことならがんばれることが改めて分かった。
・忍耐力がついたと思う。また、実験で成果が出たときの喜びは忘れられない。
・故障の原因が分からず、1ヶ月2ヶ月は考えた。そして根気よく作業をした。そして自分の将来を決めた研究でもあった。
・進学する専門学校でパーソナルカラーの授業があるので、予習ができたと思う。
・この研究は将来の自分のためにやったようなものだから、研究をして良かったと思う。この研究をしたことで、将来成功できれば良いなあと感じている。
・美容が自分はやっぱり好きなんだと思った。
・この研究をやって、ペット業界についてたくさん知ることができました。これからの将来役立つと思った！！
・自分の興味あることだったから、とても楽しかったし、今後の活動への力となれたと思う。自分への自信にもつながった。
・バリアフリー社会についてしっかり考えられるようになり、人の役に立ちたいと思った。
・新しいものをゼロから創る楽しさを知る事ができ、部活にも残せるものができた。
・自分は一人でいるんじゃないと思った。一人でやろうと思ってても、誰かの助けをかりてしまっていて、人から助けてもらうことも大切だと思った。むだなことはないと思うようになった。研究したことを将来に役立てると思った。
・アロマテラピーが好きだということ。笑顔を見るのが好き、人と関わるのが好き。今後もっとアロマを続けていきたいと思った。
・この研究によって、保育ボランティアに参加して、子どもたちと触れ合うことで、子どもたちの意外な一面を発見することができたり、「幼児の遊びがとても重要」という事も明確になったし、私が「保育士になりたい！」という夢への思いが、この研究を通して、さらに大きくなることができました！この研究をやってきて、良かったと思いました！！

デメリット・マイナスの回答（全体の約1割が回答）
・ストレスが溜まった
・目が悪くなった
・研究にお金がかかった
・時間がなくなった
・現状では何とも言えない
・成長してない
・進路に使えず、時間がもったいなかった
・デメリットだらけでした。卒研はＡＯを受けない生徒にとってはむだだと思った。
・体力がなくなった、つかれた
・推薦入試の時期と重なり、忙しい
・他の授業がおろそかになった
・先生に迷惑をかける
・先生の監視が少ないのでその気になれば気を抜いてもよかった

⑮卒業研究に対するリクエスト・後輩へのアドバイス（抜粋）
・ものをつくろうと思ったら、3年次から考えたのではおそいし、いいものがつくれないと思う。本気でやろうとおもったら、1年のときから考え始め、2年次の2・3学期から始めた方がいい。
・系列ごとにしばりつけるのはよくないと思う。去年の先輩達のように、5類も研究して良いことにした方がよい。
・パソコンの貸出。いくら手書きでいいといっても、パソコンがある人との格差は大きすぎる。授業の宿題も同じ。インターネットで調べるとか・・・無理。
・後輩へ。好きでなければ続かない。何か一つでも制作すると、形に残るし、レポートにしやすい。章の構成の仕方の説明とレジュメがわかりづらい。
・論文の提出回数を増やし（特に最終提出）、先生のアドバイスをたくさんもらってやった方が、より完成度が上がると思った。自主的に論文を見てもらえばすむこと

だが、私みたいな人はめんどくさがってしなさそうなので、しっかりそういった日を設ければいいと思った。
・発表の時間を５分（６分）以上にしてください。そして発表者を減らして下さい。
・もっと先輩を頼ると良い。（先生よりも）
・受験の時期と重なってしまうので、提出の時期をちょっぴり遅せてほしいです。
・２年生のときのアカデメイアにでたほうがいいよ。
・卒研は希望者だけやれば良い。その他の人にはべんきょうする時間として卒研の時間を利用すれば良い。
・後輩には早めに何事も終わらせておいた方が絶対いい！ということを伝えたい。
・あきらめるな！！！
・後輩に研究の大切さと大変さをわかってもらいたい
・パソコンの台数を増やして下さい。
・一般受験と卒業研究を同時にやると失敗を招く。やるならば卒研に比重をおいた方が良い。

８．総括

今年度の３年次生は、2006 年１月現在で国公立大学１０名進学を果たした。一般入試での国公立大学への進学が学力的に難しい本校では、卒業研究に代表される主体的な学習活動をとおして自己の進路意識を明確にし、大学での研究計画を積極的にアピールできる人材を育成することの重要性が改めて確認された結果であると思う。総合学科に改編されて１１年が経過したが、その間本校に蓄積された課題研究指導の経験や、卒業生達の残したレポートが、生徒の主体的活動を広く支援する形になってきたのではないだろうか。自己評価アンケートには生徒それぞれの「学びのプロセス」が鮮やかに記されていた。課題を自ら設定し、研究方法を考え、自分の思いや考えを文章にまとめる作業は、高校生の彼らには高いハードルではあるが、それをクリアした後の達成感をそれぞれ感じていることが、アンケートの文面から伺えた。

今後、普通科の高等学校でも『総合的な学習の時間』が本校の卒業研究と同様におこなわれ、大学のＡＯ入試で積極的に活用されるようになると、総合学科の独自性を維持することが難しくなるかもしれない。しかし、筑坂の持つハード（施設設備や環境）とソフト（教員や地域を含めた人材）を最大限活用する術を蓄積し整理していけば、筑坂独自の「知の創造」が可能になるのではないだろうか。

今後の課題として、生徒のリクエストにもあるとおり、レポート作成に必要なパソコンの整備、早い時期からのテーマ設定支援、レポート提出時期・回数の検討などが挙げられる。特にテーマ設定については、生徒の主体性・自主的活動のモチベーションを重視するなら、系列にこだわらないテーマを認めることも必要だと筆者は感じている。レポート提出時期については、今後一般入試による大学受験者が増加する傾向があるならば、さらに前倒しする必要があるかもしれない。そのためには、定期的な提出・教員による添削等のアドバイスが必要となるだろう。教員の負担は大きい科目であるが、生徒とともに「知の創造」に関わる、すなわち「新しい世界の扉を開く」という知的な作業のよろこびを生徒とともに味わえる科目であることを、教員も主体的に受け止めることが、大切ではないだろうか。

その一方で、アンケートでは約１割の生徒が卒業研究に対する否定的な意見を回答している。卒業研究での「学び」を見出し得なかった生徒の割合はさらにもう少し多いはずだ。その要因として、大学進学準備（推薦入試対策）との両立に苦労した点を挙げた者もいたが、テーマ設定を含めた自己の進路意識の曖昧さが、研究に対するモチベーションの低下を招いていたように見受けられる。「自分の本当にやりたいこと・学びたいことは何か」という問いに対して、真剣に考え、答えを追求しようという姿勢から逃げていた生徒には、苦しいだけの科目になってしまったようだ。今後はこうした消極的姿勢の生徒に対して教員がどのような支援をおこなっていくべきか、もう一つの大きな課題となるだろう。

さいごに「プレゼンテーション」に関する課題について言及しておきたい。昨年度の本校研究大会における「総合的な学習の時間（課題研究）発表会」において、代表生徒の発表を講評してくださった筑波大学アドミッションセンターの渡辺公夫教授は、「プレゼンテーションのスキルが上がると、皆が同じような発表を行うようになる」という意味合いのコメントをされた。たしかに、６名の代表生徒全員がパワーポイントを用いて原稿をよく覚え、スムースな発表をおこなったわけであるが、「研究内容は個性的でも発表形式は皆同じ」という印象を持たざるを得なかった。生徒それぞれが、自ら考え、自ら学んだその内実を、どのように他者へ伝えられるか、その方法についても今後さらなる充実が見られることに期待したい。そのためには、我々教員集団も、自らのプレゼンテーションスキルを向上させ、生徒に対して支援できる体制を整える必要があるだろう。

【巻末資料１】

平成17年度　卒業研究　中間発表会（5月20日）

氏　名	３年　　組　　番	担当教員	先生
テーマ			

①研究の動機（このテーマに関心をもったきっかけ）

②研究目的（明らかにしたいこと・伝えたいこと・進路との関わり）

③研究方法（研究を進める段取り・利用する手段）

④研究の概要（予想される研究結果・すでに調べたこと・調べようとしていること）

⑤章構成（具体的な目次：章構成を見れば研究の内容が把握できるように考えること）

⑥現在の進捗状況（進み具合）と今後の課題（6/27第一稿提出までにやるべきこと）

⑦主要参考文献（書籍：作者・ﾀｲﾄﾙ・出版社・出版年の順、Webﾍﾟｰｼﾞの場合はﾀｲﾄﾙとｱﾄﾞﾚｽ）

【巻末資料２】

卒業研究の記録

提出の仕方：１週間分の研究内容とこの記録用紙を重ねてクリアーフォルダーにはさみ、担当教員に毎週提出する。担当教員からは翌週に返却される。

【完成までの週間カレンダー】※該当する週を○で囲もう。 提出まであと何週？ → 残り(　　)週

4月			5月				6月					7月				8月				9月					10月			
2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4

【ｽｹｼﾞｭｰﾙ】 5/13(金) レジメ提出　5/20(金) 中間発表会　6/27(月) 報告書提出 第1稿(5枚以上)　9/2(金) 報告書提出 第2稿(10枚以上)　10/28(金) 系列内発表会 1･2年生も見学

実施日	平成17年　　月　　第　　週
活動場所	

11/ 4 (金) 研究報告書最終提出
11/11 (金) 学年発表会
2/16 (木) 校内発表会

氏　名	３年　　組　　番　　氏名
研究テー	
今週の活動目標	
使用資料・文献・機器	(文献については著者名・タイトル・出版年・出版社・ページ、 HPについてはアドレスを記録しておくこと)
活動内容の記録（書ききれない場合は裏面へ記入すること）	(月) (火) (金)
活動をふりかえる（自己評価）	(活動目標は達成できたか、どのような点を次週は工夫・改善すればよいか、計画的に進めているか、研究のｵﾘｼﾞﾅﾘﾃｨを追求しているか、何に行き詰まっているか 等)　総合評価（５段階のABCDE）
次週の予定（準備すべき事）	
指導者からの助	担当教員名（ﾌﾙﾈｰﾑで記録する）〔　　先生〕　検印

【巻末資料３】

平成１７年度「卒業研究」　２学期の評価規準

１．評価方針

◆今年度から「卒業研究」は「必履修科目」となり、５段階評価をおこないます。
（他の履修科目と同様、履修できなかったら卒業できない）

◆「研究の成果」よりも、「研究の過程（プロセス）」を重視します。
（「何が分かったか」、よりも、「研究にどれだけの時間と情熱を費やしたか」、「研究によって自分がどのように成長したか」、が評価されます。）

◆問題解決能力や表現力（ﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ・ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ能力）を総合的に評価します。

２．具体的な評価規準

以下の観点で学期末に「自己評価用紙」を提出してもらいます。教員はレポートの内容を把握しつつ、学期末のヒアリング（面接）によって活動状況とレポートの完成度を確認します。

Ａ　関心・意欲・態度

①毎週提出の記録用紙の記入状況（自分の活動を振り返って評価できているか）
②資料整理（集めた資料を青いﾌｧｲﾙに綴じたり、ﾃﾞｰﾀを作業ﾌｫﾙﾀﾞに保存しているか）
③系列内発表会の評価用紙（他者の発表をよく聞いて自分の研究に生かす態度があったか）
④製作活動（ﾚﾎﾟｰﾄ以外の作品をつくる活動を行っているか）
⑤読書量（参考図書を何冊読んだか）
⑥校外活動への参加（ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ活動など研究ﾃｰﾏに関わる活動へ自主的に参加しているか）
⑦校外の人間とのｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ（ｲﾝﾀﾋﾞｭｰや訪問など主体的に他者と関わる活動をしているか）

Ｂ　プレゼンテーション能力

⑧10/28（金）系列内発表会（発表態度・レジュメの内容）

Ｃ　レポートを書く力（知識・理解力）

9/2（金）提出のレポート第２稿について、
⑨論理的な展開の（筋道のしっかりした）内容になっているか
⑩オリジナリティと問題意識のある内容になっているか
※欠課時数が多い場合は減点の対象となる。

３．第２稿の書式について

９月２日（金）提出締切の第２稿は、以下の書式でプリントアウトし、担当教員に提出して下さい。

○Ａ４サイズ、縦置き、横書き（マージンは上下左右２５ｍｍとする）
○４０字×４０行（フォントは10.5ポイント、ＭＳ明朝体が標準）
○必ず中央下にページ番号を入れること。
○表紙は付けるが枚数には含めないで、目次１枚、本文９枚以上書くこと。
（図表・写真などのデータを含むことは可とする。）

４．夏休み中のパソコン室の利用について

７月２０日（水）～２９日（金）、８月２２日（月）～３１日（水）までの間、パソコン室を開けます（土・日は除く）。使用時間は９：００～１７：００です。
マナーを守って利用して下さい。
※パソコン室内の飲食は厳禁です。ゴミは教室に持ち帰って下さい。

【巻末資料４】

「卒業研究」自己評価（２学期）

研究テーマ（　　）　担当教員（　　）先生

３年（　）組（　）番　氏名（　　）

この自己評価プリントは、皆さんが各自の研究活動をふりかえるとともに、２学期の成績（評価）をつけるための資料となります。ありのままを正直に書いて下さい。理由も必ず記入して下さい。

【活動の記録】

①毎週提出の記録用紙について、自分の活動を振り返って評価できてましたか？（○を付けて下さい）
　できた　・　まあまあできた　・　あまりできなかった　・　できなかった
その理由：（　　）

②集めた資料を青いﾌｧｲﾙに綴じたり、ﾃﾞｰﾀを作業ﾌｫﾙﾀﾞに保存してできましたか？
　できた　・　まあまあできた　・　あまりできなかった　・　できなかった
その理由：（　　）

【系列内発表会】

③系列内発表会の準備（レジュメ作成・プレゼン準備）は十分できましたか？
　できた　・　まあまあできた　・　あまりできなかった　・　できなかった
その理由：（　　）

④レジュメの内容は他者へ分かりやすくまとめることができましたか？
　できた　・　まあまあできた　・　あまりできなかった　・　できなかった
その理由：（　　）

⑤発表は他者へ分かりやすくおこなうことができましたか？
　できた　・　まあまあできた　・　あまりできなかった　・　できなかった
その理由：（　　）

⑥系列内発表会のときに、他者の発表をよく聞いて参考になることができましたか？
　できた　・　まあまあできた　・　あまりできなかった　・　できなかった
どんな点が参考になったか：（　　）

【研究活動】

⑦レポート以外の作品をつくる活動を行っていますか？　はい　・　いいえ
「はい」と答えた人は具体的な作品について紹介してください。

（　　）

⑧この研究をおこなうために参考図書を何冊読みましたか？　（約　　冊）

【巻末資料４（続き）】

⑨内容を理解できた読んだ本、情報を得るために目を通した本の著者名・タイトルを書いてください。
（覚えている範囲で構いません。）

内容を理解できた本 （著者名）　　（タイトル）	情報を得るために目を通した本 （著者名）　　（タイトル）

⑩ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ活動など研究ﾃｰﾏに関わる活動へ自主的に参加していますか？　　はい　・　いいえ
「はい」と答えた人は、具体的な活動（いつ・どこで・何を・どのくらい）を書いてください。

（　　）

⑪ｲﾝﾀﾋﾞｭｰや訪問など主体的に校外の方と関わる活動をしていますか？　　はい　・　いいえ
「はい」と答えた人は、具体的な活動（いつ・どこで・何を・どのくらい）を書いてください。

（　　）

【全体をふりかえって】

⑫レポート作成（研究のまとめ）について、どのような苦労がありましたか？また、研究に行き詰まったときにどのように乗り越えましたか？（参考になったアドバイス・書籍等）

（　　）

⑬オリジナリティと問題意識のあるレポートになりましたか？（該当する点を説明して下さい。）

（　　）

⑬２学期を振り返って、あなたは研究にどれだけの時間と情熱を費やしたと思いますか？

（　　）

⑭この研究によって自分がどのように成長した（どんなメリットがあった）と思いますか？（あるいはどんなデメリットがあったと思いますか？）

（　　）

⑮卒業研究の活動をとおして「もっとこうしてほしい」「こんなことやってみたい」「後輩に伝えておきたい」などのリクエストがあれば下に書いてください。

ご協力ありがとうございました。